

小児の近視 点眼薬で抑制

新型コロナウイルス禍の在宅期間にスマートフォンを長時間使ったり、学校の授業でタブレット端末を活用したりして、子どもたちが情報端末に接する機会が増える中、東近江市の能登川病院は、小児の近視を抑制する点眼薬の処方をはじめた。保険適用外だが、保護者らの関心を集めている。
(齋藤航輝)

東近江 能登川病院で処方開始

同病院では昨年、眼科診

ている。

療施設「昂会アイセンター」を開設し、非常勤含め七人の医師が、眼科疾患に対応している。八月からは、六〜十四歳ごろの小児向けとして、シンガポール国立大の臨床試験で近視抑制効果が示された点眼薬「マイオピン」を取り扱っ



対象が子どもなのは、近視の主な要因に目の成長があるからだ。子どもの背が伸びるように、目の奥行き「眼軸」も長くなることで、近視は進行する。加えて、親からの遺伝や、近くを見る作業の多さによって拍車が掛かると、将来的に網膜剥離や緑内障といった症状を招くこともある。

点眼薬は、弱視や斜視といった診療で保険的に処方される「アトロピン」という成分を低濃度にしたもの。通常の濃度では、重い副作用を招く可能性があるため、濃度を低くして副作

保険適用外だが「気軽に相談を」

用を抑えつつ、眼軸が長くなり過ぎないようにすることで、近視の進行を和らげられる。

ただ、保険適用されないため、点眼薬は一本二千五百円ほどの費用がかかるのがネックだ。

同センターでは、日常的にできる近視対策として、屋内で長時間近くを見続ける作業は控えめにし、屋外で遠くを見ることを挙げる。特に、暗い部屋で情報端末を見つめると、瞳孔が開いた状態で画面からの光を浴びてしまい、網膜に障害が出るという。

学校現場については、授

業でタブレット端末を使った後、休み時間などに遠くを見ることや、テレビモニターを見る際にカーテンを閉めたりせず、教室を明るくすることを勧めている。

吉田祐介アイセンター長は「お母さん方からの問い合わせは多いが、まだまだ広まっていない。(点眼薬という)手段があることを知ってほしい」と話す。

米田一仁統括センター長は「近視はこうしたら治るというのではなく、統計や傾向に基づいている」とした上で、「世界的にはジャパニーズ・ディーズと呼ばれるほど、近視は日本人に多い。過剰に心配する必要はないが、気になることがあればいつでも相談してほしい」と呼び掛けている。
(同院)0748(42) 1333

生徒が自由に使える端末がある」と回答。学習目的以外の利用内容は、動画や音楽、ゲームが多かった。休校中に困ったことやトラブルとしては、4000人以上が「生活の乱れ」を挙げ、追加の聞き取りでは「夜眠れず、朝起きられない」「目が悪くならないか心配」との声もあったという。

担当者は、学習目的での端末利用を促す策として「学習ソフトの使い方の指導が必要」と指摘。目の健康対策には「授業時間にずっと端末を使うわけではないが、現場からも心配の声はある。探っているところ」と話した。

(齋藤航輝)

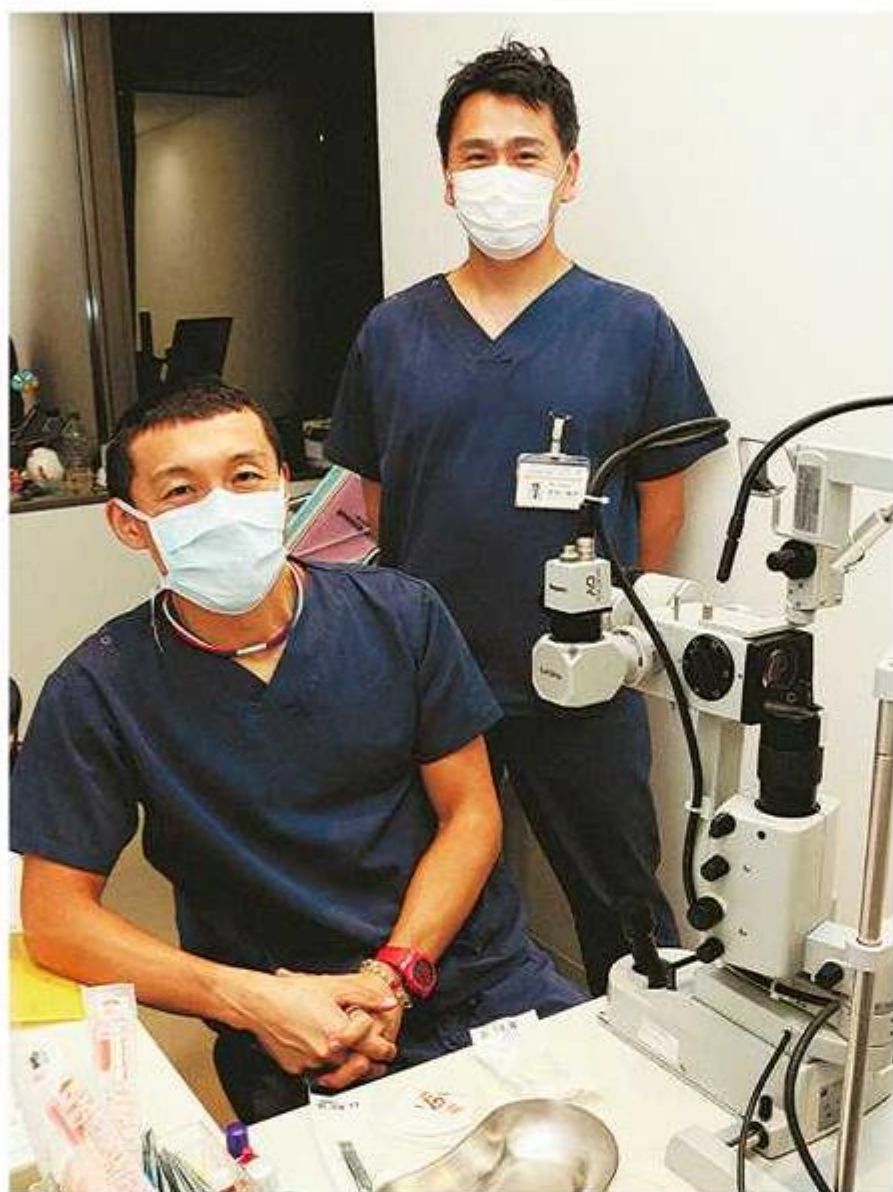
小中生の端末使用時間

1日「2~5時間」最多

東近江市教委が6月、市内の保護者向けに実施した調査によると、児童生徒の情報端末の利用は、学習目的以外では「2~5時間」、学習目的では「1時間未満」の回答が最多だった。担当者は「端末に使い慣れていても、学習目的での使い方は定着していないようだ」と分析している。

各家庭のICT環境や、端末の使用実態を把握するため、すべての児童生徒9593人にアンケート用紙を配り、集計した。

調査では、全体の62%が「児童



①近視の要因や対策を紹介する米田統括センター長(手前)と吉田アイセンター長 ②処方されている点眼薬 東近江市の能登川病院で